

令和6年度探究的な学びを中核とした 「学びの変革」カリキュラム研究開発事業		
先進的モデル地域：竹原市立吉名学園		
連携地域を構成する学校		
学校名	学級数	児童生徒数
竹原市立吉名学園	13	108
(R6.12.1現在で記入)		

1 研究の概要

(1) 研究テーマ

主体的に学び、自分の言葉で語る児童生徒の育成
～「共創」の視点に立った単元開発及び実践を通して～

(2) 特色

探究 × 共創

(3) 系統的に育成を目指す資質・能力

○知識及び技能

- ア 知識
- イ 技能（主としてICT活用力）
- ウ 探究的な学習のよさの理解

○思考力、判断力、表現力等

- エ 課題を発見する力・企画する力
- オ 活動を計画・推進する力
- カ 情報を収集する力
- キ 整理・分析する力
- ク 表現する力
- ケ 発想する力・工夫する力
- コ 評価する力

○学びに向かう力、人間性等

- サ 挑戦する力・やり遂げる力
 - シ 協働する力
 - ス 将来を設計する力
 - セ 英語力
- この内、オ 活動を計画・推進する力
ク 表現する力
サ 挑戦する力・やり遂げる力

の3つの力を重点項目とする。

(4) 研究内容の概要

○探究的な学びを中核としたカリキュラム開発

- ・本校で育成を目指す資質・能力、特に、「ICT活用力」「プレゼンテーション力」「英語力」を育成する学校教育全体の取組の充実
- ・自立した学びを実現するために必要な資質・能力、「活動を計画・推進する力」「表現する力」「挑戦する力・やり遂げる力」を育成する学校教育全体の取組の充実

例：・学園祭、各教科・領域の授業、生徒指導集会、委員会活動・学校運営協議会を核に、地域と協働した単元づくりや

教育課程の編成

○PBLの考え方を取り入れた総合的な学習の時間の単元開発

- ・「単元の三つの型」「単元づくり五つのポイント」を踏まえた単元開発及び実践を進める。

(今年度の重点)

- ①地域の人を含む多様な他者と協働し、児童生徒と地域の方等が共に課題解決に取り組む、児童生徒と地域・保護者の共創の視点

2 実践事例

○義務教育学校という特色を生かした異学年との共創

- ・3～9年生の総合的な学習の時間の単元の目的が共通して「吉名町を盛り上げる」となっている。盛り上げる手段は異なるが、目的が共通しているため、学年の垣根を越えた共創となる。

例) 吉名の食をPRしたい4年生が吉名のじゃがいもを栽培したいので畑を貸してほしいと、じゃがいも栽培を計画している7年生にお願いをしに行く。



例) 吉名町を盛り上げたい9年生が企画した吉名フェスティバルで各学年を巻き込んで、今まで学習したり、調べたりしてきた吉名町のことをPRできるような機会やブースを作成する。



3年生の「龍島太鼓」、3・4年生の「ソーラン節」の披露



吉名の文化や歴史を知ってもらう文化ブースの設置

(3年：吉名の良さ、4年：食、5年：自然、6年：歴史)



7年生による吉名のじゃがいもやじゃがいも料理の販売

- ・異学年との共創を育むための土台作りとして行う縦割り班活動



学校の諸課題について、改善策を話し合う生徒指導集会

5月「言葉でつながる言葉で深まる」
9月「挑戦 個々の才能咲かせる学園」



縦割り班での交流を深めるため毎月実施するフレンドタイム

鬼ごっこ、ドッジボール、謎解き、百人一首大会など

○地域の人を含む多様な他者と協働し、児童生徒と地域の方等が共に課題解決に取り組む、児童生徒と地域・保護者との共創・学校運営協議会の委員との共創



年度始めに、目指す子供像と今年度の研究内容について委員と理念を共有



9年生：祭りの実現・協力のお願いに委員にプレゼンテーションを行う。



6年生：歴史バスツアーのガイドの内容を見てもらい、改善案などについてコメントをいただく。



8年生：「働くこと」について委員の方にインタビューを行う。
⇒後日、YOC（吉名キャリア
チ
ャレンジ）で学んだことを
プレゼンテーションで発表
し、聞いていただく。

・吉名の地域外の方との共創



9年生：竹原市観光協会の方と共に吉名フェスティバルを1から企画・運営を行う。



5年生：江田島市のさとうみ科学館の方から吉名エコ・コースト事業の話を紹介していただく。



5年生：大久野島ビジターセンターの26年前に吉名小の児童が作成したカブトガニに関する科学研究を借用させていただく。

3 研究の成果と課題等

(1) 成果

○カリキュラム・マネジメントに取り組むことで、各教科の指導でも「単元の学習内容を身に付けさせる」という考えから、目指す子供像を踏まえ、資質・能力の育成という視点も意識して教材研究を行うことができるようになってきた。

○学校運営協議会の方と共にYOSHINA未来学の取組について考えることで、地域の人的・物的な資源を把握し、教育活動に生かすことができた。

○地域の方だけでなく、様々な専門家を巻き込みながら課題を解決していくことで、児童生徒は新たな視点を持ち、課題解決に向かうことができていた。

○目的に共通点がある異学年との共創が増え、お互いがよい刺激を受けながら学習を進めていくことで、児童生徒の熱量の高まりが見られた。

○本校独自の質問紙調査において、自立した学びを実現するために特に必要だと考えた「オ 活動を計画・推進する力」は74.2%から91.8%、「ク 表現する力」は63.3%から88.8%、「サ 挑戦する力・やり遂げる力」は79.6%から92.9%と3つの項目における肯定的な回答の割合が年度初めと比べて上昇した。

(2) 課題

●各学年のPDCAサイクルによる取組が、学校全体の研究を前進させることができた一方で、各学年に任せてしまうことが多く、それぞれの学年の成果を自分の学年に生かしたり、支援し合ったりすることが十分ではなかった。

●吉名の地域全体での共創として、育成したい子供の姿を子供だけでなく、地域、保護者とも共有していく部分が不十分であった。

●共創する人々とお互いの目的や目標を伝え合った上で議論し、目指す目的や目標を明確にし、取組を進めていく部分が不十分であった。

●自分の成長を実感した児童生徒の割合は9月に比べて2月は上昇しているものの、学年によるばらつきが見られる。（Ⅰ期 80.0%、Ⅱ期 87.0%、Ⅲ期 60.0%、Ⅳ期 95.2%）

(3) 今後の改善方策等

○全教職員が同じレベルで探究的な学びが実現できるよう校内研究体制の構築を行うとともに、過去の実践や地域の人的・物的資源についてまとめたデータベースを構築する。

（校内研修、研究授業、地域の方との意見交流等）

○育成したい子供像を、児童生徒や保護者、地域の方に分かりやすく伝えるためにイラストを用いた資料を作成し、子供と共有するとともに、PTA総会等の場で保護者、地域の方と共有する。

○子供自身が自らの成長を実感できるようにするために、キャリアログ等を活用し、個人でのPDCAサイクルが構築できるようにする。

○定期的に各期での交流の場を設けたり「見える化」の取組を進めたりし、それぞれの成果や課題を生かし合い、高め合うことに引き続き取り組んでいく。